

# 嫁入り支度

ПРИДАНОЕ

アントン・チェーホフ Anton Chekhov

青空文庫



わたしは生涯に、たくさんの家を見てきた。大きいのも小さいのも、石造のも木造のも、古いのも新しいのも。がそのなかで、ある家のことが特にわたしの記憶に焼きついていて、もつともそれは、家というより、まあ小屋に近い。ちつぽけで、平家建てで、窓が三つついていて、まるで頭中をかぶったセムシの小さな婆さんそっくりだった。外廻りは白い漆喰ぬりで、瓦ぶきの屋根に剥げつちよろけの煙突を立てているその家は、現在の主人の祖父や曾祖父が植えこんだ桑やアカシヤやポプラの緑のなかに、すっぽり埋まっていた。緑にかくれて、その家は見えない。とはいえ、うっそうたる緑に包まれているからといって、この家はやはり市街地の家に違いなかった。その家の広々した宅地は、おなじく広々した隣家の宅地と一列に並びあっていて、モスクワ通りの一部をなしていたのである。この通りを馬車で行く人はなく、通行人もたまにしかなかった。

その家の鍔戸は、いつも閉まっている。住み手が光を欲しがらないからである。彼らには光がいらぬのだ。窓にしても、ついぞ開かれたためしがない。住み手が新鮮な空気を好まないからである。しよつちゆう、桑やアカシヤやゴボウの繁みのなかで暮らしている人びとには、自然なんかどうでもいいのだ。自然の美を味わう能力は、別荘へやってく

る人たちにだけ与えられたもので、ほかの連中ときたら、そんな美があるのやらないのやら、てんで知りもせず暮らしているわけだ。自分がどっさり持っているものは、一向ありがたくないのが人間の常である。俗に「手にあるうちは大事でない」というが、それどころか、手にあるものは可愛くない、ではないか。その小さな家のぐるりは、まさに地上の楽園で、緑は深く、鳥が楽しげに啼きかわしているが、ひと足その家へはいつてみれば、——ああ、なんとることか！ 夏はむんむんして息ぐるしいし、冬はまた冬で、まるで蒸し風呂のような暑さ、それに炭の気がたちこめて、わびしく味気ない……。

はじめて私がこの家を訪ねたのは、もうだいたいぶ前のことで、ちよつと用があつたからだというのは、その家の主人であるチカマーソフ大佐から、その夫人や令嬢に宜しく伝えてくれと頼まれたのである。この最初の訪問のことを、わたしは実によく覚えている。忘れてと言われても忘れられないのだ。

まあ考えてもごらんなさい。小柄でぶくぶくした四十がらみの婦人が、怖れと驚きをつきまぜたような顔つきで、控室から広間へはいつてゆくこつちの顔をまじまじと見つめる。こつちは「よそ者」であり、お客であり、おまけに「若もの」と来ている。それだけでもう、相手を驚きと怖れの淵へ突きおとすには十分なのだ。こつちはクサリ鎌も、斧も、ピ

ストルも、何ひとつ兇器きようぎをもっているわけではないし、愛想わらいをまで浮かべているのだが、それでもやはり強盗あつかいにされるのだ。

「あの、失礼でございますが、どなた様で？」と顫え声ふるいこゑで、その年配の婦人はたずねる。そこで、ハハアこれが当のチカマーソフ夫人だと見当がつく。

こつちは名を名のつて、来訪したわけを述べる。すると、怖れと驚きの表情に入れ代つて、こんどはつんぎくような「まあ！」という歓声がほとばしり、眼がくるくると廻りだす。その「まあ」が、まるで木魂こしたまのように、控室から広間へ、広間から客間へ、客間から台所へ……あげくのはては穴倉へまで、つたわってゆく。まもなく家じゆうが、さまざまな音色の「まあ」という歓声で一ぱいになる。ものの五分もすると、こつちは客間のふかふかした、かつかと熱い大きなソファーにかけて、今やモスクワ通りが上から下まで、「まあ」という歓声を発しているのを耳にするのだ。

虫よけの粉と、新しい羊皮の靴のにおいがしていた。靴のほうは風呂敷にくるんで、わたしのそばの椅子いすにのせてあった。窓にはゼラニウムの鉢植えと、モスリンのぼろ布。そのぼろ布には、満足した数匹の蠅はえ。壁には誰か僧正の肖像がかかっている、油絵のくせにガラスがはめてあり、そのガラスの一隅が欠けている。僧正につづいて、先祖代々の肖像

がならべてあるが、どれもこれもレモンみたいに黄ばんだ、ジプシーふうの人相をしている。テーブルの上には指ぬきが一つ、糸まきが一つ、それに編みかけの長靴下が載っており、ゆかには型紙だの、まだ仮縫いの糸のついている黒い女の上うわぎ衣が落ちてゐる。隣の部屋では、ふたりの婆さんが大あわてのていで、せかせかと型紙や白墨チャコのかけらを、ゆかから拾っている。……

「どうも大そう取り散らかしております！」と、チカマーソフ夫人が言った。

チカマーソフ夫人は、わたしの相手をつとめながら、ちよいちよい当惑そうな横眼で、まだ型紙の片づけの済まない隣の部屋のドアをぬすみ見た。そのドアも、やはり当惑したように、一、二寸あいては、また閉まつたりした。

「あの、何の御用なの？」と、チカマーソフ夫人は、そのドアへ声をかけた。

「わたしの襟飾りはどこですの、お父様ルケル・モン・パール・マヴェエ・タンヴオアイエド・クルスクがクルスクから送つてくださったの？」と、ド

アごしに女の小さな声がきく。

「まあ《アー》、お前エ・ス・ク・マリイ・クだったの、マリイ……。ほんとに、なんてことを……。だつて、は

じめてのお客さまが見えてらつしやるのですよ。……ルケーリヤにきいてごらん。……」

『でもわたしたち、フランス語がなんて上手でしょう！』満足に顔を赤らませたチカマー

ソフ夫人の眼のなかに、わたしはそう読みとった。

ほどなくドアがあいて、背の高い、やせた少女の姿が見えた。年は十九くらい、モスリンの長い服をきて、金色のベルトをしていたが、そのベルトには忘れもしない、青貝細工の扇がさがっていた。娘ははいつて来て、席につくなり、ぽっと赤くなった。赤くなったのはまず、彼女の長い、幾分あばたのある鼻で、その鼻から眼もとへ、眼のまわりの米<sup>こめか</sup>噛みへと、その赤がうつった。

「娘でございます！」と、チカマーソフ夫人が歌うように言った。——「そして、マーネチカ、このお若いかたはね……」

わたしは挨拶<sup>あいさつ</sup>をすまずと、型紙がどつきりおありなものには驚きましたと、正直に言つた。母親と娘は眼をふせた。

「こちらでは、昇天節に市<sup>いち</sup>が立ちましたの」と母親が言った。——「市が立つと、いつも私どもは布地をたんと買いこみましてね、また次の市までまる一年のあいだ、せつせと服を縫いますの。縫物は一さい外へは出さないことにしております。宅のピョートル・ステパーヌイチは、格別たいして頂戴しているわけでもありませんので、わたくしども贅<sup>ぜいたく</sup>沢<sup>たく</sup>はできませんの。縫物なども、じぶんで致さなくてはねえ。」

「でも、こんなにたくさん、一体どなたがお召しになるんです？ おふたりだけではないですか。」

「まあ……こんなにたくさん着られるものですか？ これは着るのではございません！  
これは、嫁入り支度ですよ！」

「あら、ママったら、なんてことを？」と娘は言つて、赤くなつた。——「ご存じない方は、ほんとなさるじやありませんか。……わたし、お嫁になんか行きませんわ！ とんでもない！」

そう言つたが、その「お嫁」という言葉のところで、眼がきらきら燃えた。

お茶とビスケットと、ジャムとバターが出て、そのあとでまた、クリームのかかつたいちご苺が出た。夜の七時には、六皿から成る夜食が出たが、その夜食のさいちゆうに、私はふと大きなあくびを耳にした。誰かが隣の部屋で、大あくびをしたのである。わたしはびつくりして、ドアを見やつた。そんなあくびは、男でなければできない。

「あれは宅の弟の、エゴール・セミヨーンイチですよ……」と、わたしの驚きを見てとつて、チカマーソフ夫人が説明した。——「昨年からわたくしどものところで暮らしておりますの。どうぞ悪あしからずね、お客様の前へは出られない人ですから。とても変屈な人で



して……人様の前へ出ますと、すっかりあがってしまいますの。……修道院へはいると申していただけますけれど。……お役所づとめのあいだに、いじめ抜かれて、頭がどうかしたのですわ。……それでもう、やけになつて……」

夜食がすんでからチカマーソフ夫人は、坊さんの肩帯を見せてくれた。それはエゴール・セミヨーヌイチが手ずから刺繡ししゅうしていたもので、いずれ教会へ寄進することになっていた。マーネチカは、一瞬間その内気さを捨てて、パパへの贈物に自分で刺繡していたタバコ袋を見せてくれた。わたしが、彼女の手なみにさも感服したような顔を見ると、彼女はまた赤くなつて、何やら母親の耳へささやいた。母親もぱつと顔を輝かせて、わたしを納戸なんどへ案内しようと言いだした。納戸へ行つて見ると、大きなトランクが五つほどと、それに小さいトランクや箱がどつきりあつた。

「これ……嫁入り支度ですの！」と、母親はわたしにささやいた。——「みんな、うちで縫いましたのよ。」

その陰気なトランクの山を、ちよつと眺めて、わたしは愛想のいい女主人たちに別れを告げはじめた。またいつか訪ねてくるように、ふたりはわたしに約束させた。

その約束を、はからずも私がはたすことになつたのは、最初の訪問から七年ほどして、

さる訴訟事件の鑑定人の役目で、この小さな町へ出張を命ぜられた時であった。覚えのあ  
る小さな家へ立ち寄るなり、わたしが耳にしたのは、あの同じ「まあ」という声だった。  
……顔を忘れずにしてくれたのだ。……思えば当然だ！ わたしの最初の訪問は、かれら  
の生涯には大事件だったし、それにいやしくも事件となると、それが滅多に起こらない場  
所では、永く記憶されるからである。わたしが客間へはいつてみると、この前よりもつと  
太つて、もう白髪あたまになった母親は、ゆかに這はいつくばつて、何やら青い布地を裁た  
ていた。娘はソファアーにかけて、刺繍をしていた。やはり散らばっている型紙、あい変ら  
ずの虫よけ粉の臭におい、すみつこの欠けた例の肖像画。とはいえ変化は、やはりあつたのだ。  
僧正の肖像の横に、ピョートル・セミヨーンヌイチの肖像がかけてあつて、母も娘も喪服を  
きていた。ピョートル・セミヨーンヌイチは、将官になつて一週間目に死んだのである。

思い出ばなしが始まつた。……将官夫人は、わつと泣きだした。

「わたくしども、大そう悲しいことがありますのよ！」と彼女は言った。——「ピョート  
ル・セミヨーンヌイチは——御承知ですかしら？——もうおりませんの。わたくしはもう、  
これとふたりきりですから、自分で自分たちの始末をつけて行かなければなりませんの。  
もつとも、エゴール・セミヨーンヌイチは生きていますけど、あの人のことでは、いいお話

は何ひとつありませんでねえ。修道院へは入れて頂けませんでした。それと申すのも……あんまり御酒ごしゅを頂くものですから。で今じや、なおのこと、やけになって頂くのですよ。

わたくし、貴族団長のところへ伺つて、お願いしてみようと思ひますの。まあ思つても御覧なさいまし、あの人はもう何べんもトランクをあけて……マーネチカの嫁入り支度を引きずり出しては、巡礼にやつてしまふんですもの。もうトランクが二つ、すっかり空っぽですよ！ この調子で行きましたら、うちのマーネチカは、何一つ嫁入り道具がなくなつてしまいますわ……」

「あら、ママつたら、何をおつしやるの？」とマーネチカは言つて、顔を赤くした。――「ご存じのないかたは、ひよつと本当になさるかも知れないわ。……わたし、お嫁になんか、決して決して行かなくてよ！」

マーネチカは、さも感に堪たえぬといったふうで、期待のまなざしを、じつと天井にそそいだ。それで見ると、いま言ったことを信じていないいらしかつた。

控室のほうに、その時ちらりと見えたのは、小がらな男の姿で、大きく禿はげあがつて、焦こげ茶ちやいろのフロックを着て、長靴の代りにゴム長をはいている。あつと思ふまに、鼠ねずみのようにちよろりと消えた。

『あれがエゴール・セミヨーヌイチだな、てつきりそうだ』と、わたしは思った。

わたしは母親と娘を、いっしょに眺めた。ふたりとも、ひどく老けて骨ばっていた。母親の頭は銀いろに光っているし、娘もやつれ、しぼんで、母親の年に五つとは違わないように見えた。

「わたくし、貴族団長のところへ伺つて」と老夫人は、さつき話したのも忘れて、またくり返した。——「お願いしてみようと思えますのよ！ だってエゴール・セミヨーヌイチは、わたくしたちが縫いためるはしから、何もかも持ちだして、後世のためとか申して、どこやらへ寄進してしまうんですもの。そのうち、うちのマーネチカは、何ひとつ嫁入り道具がなくなつてしまいますわ！」

マーネチカはぽつと顔を染めたが、もうなんとも言わなかった。

「またすっかり新調しなくてはなりませんわ。でもわたくしども、一体どんなお金持ちでして！ 何しろ、親ひとり子ひとりですもの！」

「ほんとに、ふたりきりですわ！」と、マーネチカもくり返した。

去年のこと、わたしは運命のみちびきで、その家をまた訪れることになった。客間へ通りながら、ふと見ると、すっかり老いこんだチカマーソフ夫人の姿があった。彼女は黒い

喪服に身をつつみ、白の喪章をつけ、ソファーにかけて何やら縫物をしていた。それと並んで、小がらな老人が、焦茶色のフロックに、長靴がわりのゴム長をはいて、坐っていた。わたしを見ると、小がらな老人は飛びあがりざま、客間から駈<sup>か</sup>けだして行つた。……

わたしの挨拶にこたえて、老夫人はにつこり笑つて、こう言つた。

「ジュ・スユイ・シャルメ・ド・ヴールヴオアール・ムッシュまたお目にかかれて、嬉しゅうございますこと、あなた。」

「何を縫つてらつしやるんです？」と、暫<sup>しばら</sup>くしてわたしはきいた。

「肌着ですの。縫いあがつたら、教父さまのところへ、かくして頂きに行きますの。さもないとエゴール・セミヨーヌイチが、また持ちだしますものね。わたくしこの頃は、何から何まで教父さまに預かつていただきますのよ」と、彼女はひそひそ声で言つた。

そして、すぐ目の前のテーブルに立ててある娘の肖像に眼をやると、ほっと溜<sup>ため</sup>息をついて、こう言つた。

「何しろ、ふたりきりですもの！」

だが、娘はどうしたのだろう！ あのマーネチカは、どこにいるのだろう？ わたしは、とうとう尋ねなかつた。この深い喪に服している老夫人に、たずねてみる気にはなれなかつたのである。そして、わたしがその家に坐っているあいだも、やがて席を立つてからも、

マーネチカは出てこなかったし、その声もしなかったし、彼女の物静かな内気な足おともしなかった。……あらためて訊<sup>き</sup>くまでもない、わたしの心は重かった。

(Приданое, 1883)

## 青空文庫情報

底本：「カシタンカ・ねむい 他七篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年5月16日第1刷発行

2008（平成20）年6月25日第2刷発行

底本の親本：「チエーホフ全集 第二巻」中央公論社

1960（昭和35）年発行

入力：米田

校正：小林繁雄

2010年5月24日作成

2012年2月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 嫁入り支度 ПРИДАНОЕ

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 アントン・チェーホフ Anton Chekhov

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>